



り捻挫したり、しばらく舞台大丈夫なんかな?と。膝の手術してからは、今スポーツ全然していない。残念ですけども。映画観たりとかはしますね。

**Jerry** 能をする人たちには怪我が多いのでしょうか?

**杉浦:**膝は結構多いですね。飛び上がり安座っていう技なんですけれどもジャンプをして胡坐をかく。ジャンプして落ちるんです。そうすると、まあ、守るものが膝はないんですよ。大体は、激しい動きの中でずーっと前に進んで行ってジャンプして、落ちるから、ちゃんと止まってジャンプすればいいんですけども、勢い、気合が入りすぎていると前に進んでいるから着地したときに、膝に影響が来る。そういうことで膝を痛める人がいたりします。あとは、跳び返りというのがあって、ちょっと失敗したら膝をガーンて打ちはる人がいるんですね。そんなんで怪我をしたり、あとは正座ですね。正座していることが多いから太腿を鍛えておかないと、あまり膝に良くないのに、更に膝を痛める動きがあるから良くないんです。ある程度スポーツを若いときにするとか、鍛えている方がいいんだと思います。

**Jerry** 先生は今回初めてシンガポールに来られましたか?

**杉浦:**はい。

**Jerry** シンガポールで何か試したいことはありますか?

**杉浦:**いや、特に試したいとは思っていませんでした。ただ、見て回るっていうだけで。いやあそのプールには行きたかったんですけども、マリナベイサンズ(笑)。あそこは、宿泊の人しかプールにも入れないんですね。展望台はいけるんですね。それは残念と言えば、残念でしたね(笑)。景色は同じ景色が見れるんですけどね。なんかあのこぼれ落ちそうなテレビでやってる、どんな感じか体験はしてみたかったんですけどね(笑)。

**Jia** シンガポールの印象はどうですか?シンガポール人についてはどうですか?

**杉浦:**すごく綺麗な都市というか...私が出会った人たちはすごくいい人たちばかりです。皆さん笑顔が素敵だなって。

**Jia** 日本の現状では女性が能をするのは難しいらしいそうですが?

**杉浦:**そうですね、プロの場合ね。アマチュアで能のお稽古をする女性は多いね。プロはあまり女性はいないんです。もともと男性しかプロは昔からいない男の芸能なんです。ま、今日見られてただけ感じて頂けたかわかりませんが、謡を謡うのも、動きをするのも強いんですね。女性の役をするのも芯に力がある。ただ立っているだけでもああいう風にくっつと腰にいれる、女性って体つきも、物腰も柔らかいんですね。だからいくら女性が力を入れて構えても、男性よりもやっぱり劣ってしまう。声の強さなんか特にそうです。ガツと迫力で謡うときに、男性の太くて、どんっていきのと女性ってどうしても細いですから。高い声、通る声は出ますけれども低い声の太いどーんという強さが絶対出ない。そういうところが不利ですね。ですから女性がこの世界で上手だなんて言われるのは、よっぽど男性より努力しないと辛い部分があるから大変なんです。今は女性もプロになれるのですが、中には女性が出られない曲っていうのがあったり、公けの会では女性の人は出られないっていうのが今でもあるんですよ。男女混合になってしまうと一緒に謡を謡うコーラスのような、主役が喋っている言葉を代弁するとか、シテの心の様を代わりに謡うとか、男性と同じ低さで謡えない。違和感がある。本当のちゃんとした公けの会では女性が出られないっていう風にどうしてもなってますね。

**Jia** ネットで能と他の芸術のパフォーマンスを見ましたが先生にはそんな経験はありますか?

**杉浦:**私はありませんが、お家元が森英恵さんデザインの衣装で、蝶の精の舞をされたことがあります。それは衣装だけでした。家元は歌舞伎の玉三郎さんと一緒に舞ったりされていますけれども、そんなに混ざってじゃなくてね。なかなか他の楽器と一緒にするにはよっぽど上手くしないと駄目で、能の楽器っていうのは旋律、メロディー



舞を披露される杉浦さん

を奏でる楽器っていうのがないんですね、三つ打楽器で、笛が唯一ありますけれども、笛もメロディーじゃないんですね。状況を表していたりとか、ちゃんとしたドレミファソラシドを表していない。そこにギターであったり、ピアノであったり絶対音階が入ると、どういうイメージになるのかっていうのが、想像がつかない。やってみて上手いかなかった時には、三味線とかお琴も入っていませんから、そういう旋律を奏でる楽器が入っていない意味が分かるかもしれませんし、能だけでやる良さが分かるってつて事かもしれませんね。

**Pauline** 一番好きなストーリーは何ですか?

**杉浦:**よく聞かれるどんな曲が好きですかっていうのは、あんまりないんですね。その時々で色々変わるんで。今やっている曲とかね、さっき言いました女性が出られない曲で『翁』っていう曲ね、ストーリー性はないんです。天下泰平、五穀豊稔、農耕に雨が降って農作物が育って、儀式的なものなんです。観世の家元がする、それぞれの流儀の家元がする。それをやらせて頂くとやっぱり気持ちはいいですね。大体お正月とかに年の初めの一番最初の能の会に、その『翁』が演じられる事が多い。そうすると気も引き締まります。曲の前は必ず精進潔斎と言って本当は7日間、身を清めないといけないんですけども、今はそんなことはなくて、その日の朝だけ男性だけで食事を食べたりとかいうことをして臨む。舞台に出る前は必ず御神酒、お酒を口に含んで塩で身を清める。洗米と言ってお米を洗ったものを口に含んで、そういう儀式をする人、出演者全員がするんです。それで舞台に出て行くってことをしますから身が引き締まりますし、ある意味気持ちが良いつていうのがありますね。

あとは、『道成寺』っていう曲があるんです。道成寺っていうお寺が和歌山の方にあるんですが、そこにまつわる逸話の話で、能舞台に大きな鐘が吊り下げられます。60キロから70キロぐらいの重さで、綱を、柱に輪っかがあるんですけど、そこに通して、上に滑車があるんですけど。それを一人で持って重たいんですけど、鐘の中にジャンプする。ジャンプする時に鐘は上から落ちてくるんですね、消えた状態に入る、っていうのがあるんですけど、頭打ったりすることもありますし、タイミングが遅かったら足が見えた状態で不細工なんで、ぱっと消えた状態に入るのがいいんですけど。一番綺麗に入った時っていうのは、ほんまに頭が一と打ったら綺麗に入るんですけど中で脳しんとう起こすんですね。本当にムチウチになられた方もいますし、ちょっと暫くおかしくなられた方も中にはあるんですけどね(笑)。そういう危険な曲なんですけれども、面白いと思いますね。能楽師の卒業、若い時から一人前になるための卒業試験みたいな感じの曲だと言われるんですけど修行を積んで独立をして、これから自分一人でやっていくっていう時に『道成寺』を最初にするんです。もうちょっとしてから『道成寺』をした時っていうのは、なんか自分で成長したかなっていう、今まで20何年やってきたのがそこで試される、そういう意味でも面白いやりがいのある曲かなって思いますね。

**Pauline** 弟子入りの条件は何ですか?

**杉浦:**別に条件はないと思う、本人のやる気さえあれば。



能面の説明をされる杉浦さん

**Pauline** 外国人でもできますか？

**杉浦:** できるでしょうけれど、実際に観世流ではないです。金剛流では女性のプロの方がいらっしゃいますね。何人なのか分からないですけども英語をおしゃべりになるので、よく薪能っていう野外で薪を焚いて夜にする能の催しがあるんですけども、夏によくやる。そんな時っていろんな人が見に来てくださるんで外国人の方も観光で来てその時の解説なんかはその人がしていますね。英語がしゃべれますよってインフォメーションのところに座ってらっしゃいます。

**Pauline** 能の歴史は650年ありますが、何か変わったことはありますか？

**杉浦:** 随分変わっていると思いますよ。想像ですけど。まず速度が、時間がすごく遅くなっていると思います。昔は1日に5曲するのが常だったんですが大体今現在、1時間半ぐらい平均でかかります。1時間で終わる曲ってあんまりないんで、1時間半前後やる。それを5曲となると相当の時間でしょう？その間にも狂言があったり、休憩があったりします。そうすると朝の10時からやるのが多いので、17時、18時までかかる。お殿さん、武士達が観てましたから、もつと早くて短かっただろうと思います。

今日、強吟、弱吟について説明したの覚えてますか？節を強く謡うのと、弱く謡うっていうのがあって、音程が上、中、下ありましてね、その上、中、下でも強く謡うのと、弱く謡うのでちょっと違うんです。『高砂』は強吟なんですけれども、もともと強吟はなかったと思います。弱吟しかなかった。昔は音階が細かくたくさんあったんですね。それを強く謡いたいときには音程差の抑揚があると強く聞こえないので、上音と中音の高さを一緒にしちゃったんですね。音階を少なくしちゃって、それによって強く謡おうとするように、いつの時代か、なったんですね。だいぶ早い時期ですよ。最初にできた時は強吟はなかったんだと思われる節回しが残っているんです。そういうことも変わっている。

今現在は新しい曲はなかなか出来ないんですけども江戸時代に徳川家康が鎖国したときに能も曲をを制限されて、今の曲を提出させられて、それ以上新しい新曲は作るなという御沙汰がきたんですね。それによって、その1曲を洗練する、磨くってことをしたんですね。だから、江戸時代から能役者は新曲を作ることはなくなっちゃったんですね。今現在も新曲作るっていつても、すぐに作れない。昔はその時代時代にあった社会情勢とか、そんなんを盛り込んで謡う曲をストーリーを作ったんです。

**Pauline** 素晴らしい能をどうやって次の世代に伝えていくんでしょうか？

**杉浦:** 息子はやっていますけれども、ただ単に息子がやっているだけでは、同じ時代が続くかどうか。能を好きだ、能を観に行きたいっ

ていう日本人がいつまでもいるとは限らない。その時代時代にあった、売り方で、今日みたいな体験をさせてあげるとか、そういうのも盛り込んでいくっていうのも一つですね。ただ、それをするだけでは駄目ですね。新しいことを次に伝える、ちょっと変わったこと、目新しい事をしたら皆さんの目を引きますけれども、それだけやってたら芸が落ちていくっていうんでしょうかね...うーんまずは自分を磨く、とにかく稽古をするっていうのが一番大事でしょう。実力をつけて、なんかの時には、こっちはいける、こっちはいけると色んなことが出来ると。ちゃんと本流をやれば自然と来てくださるかなってなるから、それを伝えていく。それを見失わない事っていうのが一番大事なかなと思います。

**Pauline** お能を観るのにお客様のマナーとかありますか？

**杉浦:** 観るのに、特にないです。どんな服装で行ってもいいし、ジーンズとか、短パンとかでもないですし、観るのは自由です。拍手するタイミング、どこで拍手するかという人もいますけれども、私はそれは思わないんですね。途中でなんでも感動して拍手したくなったところで拍手していただいたらいいと私は思っています。そう思っている人は少ないかもしれませんが、先程の『道成寺』でしたら前半で鐘に入れたら大体拍手起りますね。普通、そういう時に拍手しないんですが、『道成寺』の時だけはそこで拍手起りますね。あんまり他の曲ではそういう場面はないんですね。後は、済んだ時に全部がシーンとなってから幕まで行くんですが、その時にいつ拍手をするか。すぐに拍手する気にはならないんですね。観てますからね、その緊張がほぐれて、は一つになった時にしていただいたらいいんだと思うんです。それが今はなんかもう、多分ほぐれているはずなのに、ずっと待ってて、待っててほんとに幕に入る時に、わ一つっていうのが多いです。あんまり拍手しないで下さいって書いてある時もありますけどね。

曲によっては拍手出来ないっていう時もあります。『隅田川』の、悲しいって終わった時は、会場も悲しみに溢れて、なかなか拍手する気分にはなれないので最後パラパラって感じになることが多い。この間やりました、『卒都婆小町』っていうのも、そんな感じでしたね。お婆さんなんですけれども、能では老女の役が一番難しいって言われてて、その曲の一つを初めてやったんですけど、杖をつけて腰曲げて歩いていきます。幕に入るまでに相当時間かかる。その間、誰も拍手しないんですけど、最後、幕に入る時にパラパラと始まって、結局わ一つならないパラパラのまま終わったんで、ちょっとさみしい感じがしました(笑)。拍手がいつもより薄かったっていう気がしました。うちのお弟子に聞いたら、先生感動して拍手できませんでしたって言うました(笑)。

**Patrick** お能の稽古以外に他に運動とかダイエットとかパフォーマンスに備えるようなことはされますか？

**杉浦:** してない能楽師が殆どですね。歌舞伎役者さんのほうがしていると思う。なんでしてないのかというと多分、能楽師はプロなんですけれども、レッスンをしています。趣味で習う人に普段教えているから舞台だけで生きていないんですね。教えるってことをしてお金を貰っている。舞台だけに専念しているんだしたら、ひよっとしたら鍛えるかもしれない。歌舞伎役者さんは普段教えている人はそんなにいないでしょう。舞台だけやったり、芸能活動やってられたり自分を鍛えたり磨いたりしていると思いますけどね。でも勿論能楽師も自分でちょっと運動して、膝悪くならないようにして、ジョギングしてるとかしてる人もいます。

**Patrick** お能のパフォーマンスの前に精神統一みたいなものをするんですか？面をかぶってキャラクターの性格になるきっかけとありますか、そういうのが自然とあるんでしょうか？

**杉浦:** 幕出る前に控えているところ、鏡の間っていう大きな鏡の前に座って、シテだけが座るんですね。椅子に腰掛けて。そこで能の面をつけるんですけども、つける前に必ずこう頂くんですね。色々感謝の意味を込めるのと、これが能役者の命でもあります大事なものです。面って。この人物になるっていう意味もあったり、あるいは代々この能面、装束もそうですけれども、装束よりも長く伝わるも

のですね。衣装ってやっぱり生地ですから、破れますし使えなくなつて捨てるのも多いですけど、面はそんなに傷まないんですね。剥落、塗料がはがれたら修繕して使えますから。ずーっと使える。先祖代々のを自分が使わせて頂く感謝の意味も込めて、必ず頂いてつける。その時にその人になりきって言われていますけれどもね。そんなに私は深くは思わないんですけれども、でも本当はなりきってはいけません。離見の見っていう、風姿花伝の中で世阿弥が言った言葉がありますが、なりきるんですけれども第三者の自分の目、なりきってやっている自分を外から見ている自分、冷静に見つめている自分がないと駄目っていうね。なりきってしまうと自分が夢中になってお客さんからどう見られているかが分からない。なりきるんですけれども、ちょっと離れて今の自分が演じているのがお客さんの目にどう映っているのかって、どんな格好しているんだろうかっていうことを冷静に見つめる目をもってなりきる。そういうのが大事と言われていきますね。

**Patrick** どんなふうな感じですか？

**杉浦** 私の場合は一度だけなんですけど、泣いてしまったことがあるんです。『隅田川』という曲をやった時のことです。子供がいなくなって探し廻っているお母さんの役なんですけどね。探し廻った子供は人さらに遭って、結局、野垂れ死んでしまったっていうのを聞かされるっていう、再会がない、悲しみに終わる曲なんです。大体は、再会して終わる、めでたく一緒に仲良く自分の家に帰って話が殆どなんですからけれども。その『隅田川』は最後はもう死んで別れるっていう、その子供の幽霊に出会うっていうだけの話なんです。それをやって

いる時に自分の子供は生きてますよ、長男は23歳、次男が高校入ったか、中学3年生だったころです。離れて住んでいましたものですから、うるうるってきて本番の時に謡いながら、ちょっと泣きました。いけないことですね。まあいうたら離見の見になってない。第三者の目になってないんで、のめり込んでしまって別に子供は死んでしまっていないんですけれども、演じているお母さんの気持ちになって、涙ぐんでしまった。わかった人にはわかったみたいですね、お客さんもね。先生あるとき泣いてたでしょって(笑)。その時は私が泣いているのを感じて、逆にうるうるってきましたっていうお客さんもいましたね。

**Patrick** 最後の質問なんですけど、お能の未来、日本の伝統文化の未来、どういうふうに思われますか？

**杉浦** そうですね、未来ね。前途洋々ではないですけども、消えてしまうとは思わないですし、形を変えながらも必ず、ずっと残り続けると信じています。それがやっぱり今やってる能役者がみんなそう思っていないと、一丸となってそういう思いがないと皆さんに伝わらない。みんなが絶対に能を広めるんだと、能を知ってもらうんだっていう一丸となる気持ちがないと将来には繋がらないかなと思います。私は単なる自分の昔からの夢で、日本一上手になりたいと思ってるんですね(笑)。もうすごい野望があるんで、絶対なれないんでしょうけれども、日本中で一番上手やな、素晴らしいなって一生に1回くらい言われたいなっていうぐらいの夢を持って生きています。

(文責:笠崎あとも、写真:日本語を話す会 Mr.Kenney Ng)



杉浦さんに指導してもらっている  
Jerry Yongさん



能衣装を初めて着せてもらった  
Jia Qi Tayさん



杉浦さんに能面をつけてもらう  
Pauline Ongさん



体験レッスンに参加する  
Patrick Lzwさん



(左から) Jia Qi Tayさん、Jerry Yongさん、杉浦豊彦さん、Patrick Lzwさん、Pauline Ongさん

## インタビュー後談

持参された能面に興味津々の参加者達に、般若面と美しい女面をかざしながら、女性の二面性を語りかけるユニークな説明。次々と眼前に繰り広げられるきらびやかな能装束に、その場の参加者達にどよめきが起る。更に面と装束をポーリーンさんが装って雅な姿に変身すると、会場からはため息が洩れた、本物の美しさの迫りに魅せられたひととき。鮮やかな舞姿の後、イベント後の質問者達に答えていただいた杉浦氏のお話は、能舞台の橋懸かりに続く幕内の世界をも垣間見ることが出来たインタビューでした。

※インタビューは日本語で行われました。